

縄文への憧れ

岡崎 良介



岡崎良介オフィシャルサイト
okazaki-ryosuke.com

きっかけはよく憶えていないのだが縄文時代に興味を持った。機会を見つけてはあちこち遺跡を訪れ、気に入った土偶を集め、いつのまにか大概のものが揃ってしまった。



勿論、現在、上野の国立博物館で開催中の“特別展「縄文—1万年の美の鼓動」(縄文展)”も見に行った。

これまで漠然と愛でていた土偶たちを、年代順、体系的に眺めることが出来て大変有益だった。まだ見られていない方には是非お勧めする。

理由はうまく言えないのだが、何か我々のDNAに響くようなものがあるような気がする。

備前焼の大家もそう言っていた。

それともう一つ、これははっきりと言えるのだが、私が強く縄文に憧れる理由は、別のところにある。我田引水かもしれないが、昔読んで大変感銘を受け、未だに折に触れて読み返している“神々の沈黙(ジュリアン・ジェインズ著:紀伊國屋書店)”の中に書かれていた、「右脳に囁きかける神々の声」が、縄文の世界に浸っていると、自分にも聞こえてくるような気がするからだ。“神々の沈黙”によれば、我々の“意識”は“言葉”から始まり、それが文字化することで精緻化され、強化されていったらしい。そしてその情報は全て左脳に格納され、人間が文明を興し、社会を作っていく原動力になったとされる。

しかし“言葉”が生まれる前はまだ“意識”は誕生せず、その時代の人間は右脳によって“神々の声”を聞いていた。それは恐らく本能に近いものであろうが、その“神々の声”によって、人間は善悪の判断を行い、集団生活を営み、平和に暮らしていた。恐らく、縄文時代もそうであったのであろう。

信じてもらえないかもしれないが、“神々の声”は何度か聞いた気がする。
“神々の声”ではないのかもしれないが、右脳に何かが見え、何か強いメッセージ、命令のような何かを感じたことがあるのだ。直観よりももっと深いところにそれは響き、何かしら将来につながる重要な決断を導いたことは確かだ。
しかしその声は、聞きたいと思っても聞けるものではない。だから何か聞こえてこないかと縄文に憧れているのかもしれない。
縄文展でもひたすら耳を澄ましてその声を待っていた。

そして聞こえた気がした。
だからその命令に従って、今日もこうして書いている。

岡崎 良介



岡崎良介オフィシャルサイトでは、
ビデオマガジン・週間戦略・月次ミーティング等
様々なサービスを提供しております